フロイトとスピノザ（I）

河　村　　厚

目　　次

序
第一章　フロイトの「隠された」スピノザ書簡　　（以上，本号）

序

十七世紀オランダの哲学者，バルーフ・スピノザ（1632-1677）は，現代に至るまで哲学や倫理学のみならず政治思想，環境思想そして心理学など[1]の多様な分野に大きな影響を与え続けてきた。しかし，スピノザから精神分析学の創始者ジークムント・フロイト（1856-1939）にもたらされた影響は，一部のスピノザ研究者が散発的に問題にしてきたのみで，特に日本においてはほとんど問題にされてこなかったと言ってよい[2]。

1）　スピノザから理論的影響を受けた現代（二十世紀）の心理学者としては，例えばヴィゴツキーやコールバーグの名前が挙げられる（それぞれヴィゴツキー：2006，河村：2013第二附論を参照）。しかし十九世紀ドイツの精神物理学者フェヒナー（1801-1887）――彼がフロイトに与えた影響は計り知れないものがある（注17を参照）――がスピノザから受けた影響についてはあまり知られていないし，研究もされていないようである。なおフェヒナーとスピノザの一致点（心身並行論）については Bernard：1972，213-214 に少し詳しく述べられている。また門林岳史は，フェヒナーの『ゼンド＝アヴェスタ』（1851年）を厳密に読解しつつ，フェヒナーは，「神と世界の段階において精神と物質の一致」を見ているが，彼の〔唯物論的視点と唯心論的視点の〕「交替する（自然的）方法」という観点は，スピノザの観点（心身並行論）を発展させたものであると解釈している（門林：2000，160-161）。本稿では多くを論じることはできないが，フロイトとスピノザの関係を研究するうえでこのフェヒナーという存在は極めて重要なものである。

2）　このフロイトとスピノザの理論的影響関係という問題および両者の比較研究は，我が国においては未だほとんど研究されていない。管見の限り，我が国における↗

しかし，フロイトとスピノザの両方の理論に精通する者であれば，決定論や宗教批判のみならず両者に共通するものが少なからず存在することに気づいているはずだ[3]。では，両者の比較研究が細々としか進展せず，スピノザからフロイトへの影響が表立って論じられてこなかったのはなぜか。その躊躇の背景には，本稿が第一章で確認する，フロイト自身のスピノザに対する「異様な拒絶」，「異様な沈黙」があったと考えられる。本稿では，フロイト自身が直接にスピノザに言及したテクストや書簡を全て精査し，それに関連したフロイトのテクストを分析することで，この沈黙と拒絶を掻い潜ってフロイト精神分析学において生きるスピノザ思想に到達し，それを沈黙の理由と共に浮かび上がらせたい。

現在のところ刊行されているフロイトの著作や書簡の中で，フロイトがスピノザに言及しているのは五箇所のみである[4]。

まず，フロイトの著作について言えば，ドイツ語版全集の全著作索引を見ると，「スピノザ」あるいは「スピノザ的」という言葉はわずか二回しか使われていないことがわかる（Freud : GW/XVIII/1068）。具体的には，『機知』（初版1905年）という著作と『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の想い出』

↘唯一の先行研究は，松田克進「スピノザと精神分析」（1995年）である。なお海外における重要な先行研究のいくつかは，本稿で順次取りあげて検討していく。

3)　フロイトとスピノザの比較研究の草分け的な論文の中で，バーナードはこう述べている。「心理学における精神分析学派の貢献に精通する機会を持ったスピノザ研究者の誰もが，フロイトの基本的見解とこの十七世紀の哲学者の多くの接点によって感銘を受けないではいられない。実際に本質的な要素における一致はとても強烈で，特に感情理論に関しては，両思想家の態度（ムード）や方向性は極めて似ており接近もしているので，これに関して，精神分析家の側で，彼らの理論的見解とスピノザのそれとを比較したり関係づけるというきちんとした試みが何もなされてこなかったことに，人は驚くに違いない」（Bernard : 1946, 99）。

4)　〔フロイトがスピノザに言及している五箇所〕

①　『機知』（初版1905年）

②　『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の想い出』（初版1910年）

③　ビッケル宛て書簡（1931年6月28日）

④　ヘッシング宛て書簡（1932年7月9日）

⑤　ヘッシング宛て書簡（1933年3月19日）

（初版1910年）という著作である。この『機知』の中でフロイトは，詩人ハイネの言葉としてスピノザに触れ，「『我が不信仰の同志スピノザ Mein Unglaubensgennose Spinoza』とハイネは言った」（Freud: GW/VI/83〔邦訳91〕）と述べて，ここから一種の「機知」の技法の分析を行っている。

一方の『ダ・ヴィンチ』の中では，「レオナルドの展開は，あえて言うならスピノザ的な考え方（spinozistishe Denkweise）に極めて近い」（Freud: GW/VIII/142〔邦訳21〕）と述べている。フロイトの全著作の中でスピノザの名に触れたのは，この二箇所のみであり，それぞれの箇所において，スピノザの理論自体についての具体的な言及は全くない。それでもこの二箇所のスピノザへの言及は，本稿が以下に示すように，フロイトの精神分析学にとって重要なものである。

以上の二つの著作におけるスピノザ言及の他に，フロイトは三つの書簡において，スピノザに直接言及している。それは，1931年から1933までに二人の研究者に送られた3通の書簡である。それらの書簡の中でフロイトは，直接的にスピノザから影響を受けていることやスピノザへの敬意を告白している。スピノザからフロイトへの強い影響の証拠ともなるこの三つの書簡は，その全体の翻訳がまだなされてはいない。そこで本稿では，まず第一章で，この三つの書簡の全体を一挙に翻訳し掲載するとともに，それらに詳細な分析を施し，続く第二章で『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の想い出』においてスピノザに言及された箇所を分析する。そして第三章では，『機知』におけるスピノザ言及も詳細に検討することになる。このように，本稿は第三章までで，フロイトが自らスピノザに言及した五箇所全てを題材にして[5]，スピノザからフロイト

5）この五箇所全てを総合的に論じた論考を著者はまだ知らない。近年の研究においても，例えばヨーヴェルは，「フロイトの全著作のうちには，スピノザへの直接的な言及が三度だけ登場する」（Yovel: 1989 vol. 2, 158〔邦訳469〕）と述べて，本稿前注の②，③，④のみを分析している。松田も，「少なくとも一つの著作および三つの書簡の中で彼〔フロイト〕はスピノザの名前に言及している」として，本稿前注の①を見落としている（松田：1995＝2011,162）。その意味で①～⑤の全ての箇所を精査したうえで，フロイトとスピノザの比較研究をするということが本稿の特徴であり，それはこのテーマでの画期的な研究となろう。

への影響を考察する。そして第四章と第五章で，フロイトのそれら以外の著作や資料も含めたフロイトの精神分析学全体とスピノザ思想との比較研究を行う予定である。

第一章　フロイトの「隠された」スピノザ書簡

第一節　スピノザ書簡の翻訳[6)]

■フロイトのスピノザ書簡①（フロイトからビッケルへ，1931年6月28日付）（第一スピノザ書簡）

拝啓

スピノザの学説への私の依拠（Meine Abhängigkeit von den Lehren Spinozas）については進んでお認めしましょう。彼の名前をわざわざ直接に引用しなかったのは，私の諸前提を彼自身の研究からではなく彼によって醸し出される雰囲気（Atmosphäre）から引き出したからなのです。そしてまた，哲学的な正当化一般を行うことは私にとっては重要ではなかったからです。生来私は〔哲学の〕才能に恵まれてはいないので，この災いを転じて福となし，可能な限り加工を施すことなく，先入見を持ち込まず，そして準備なしに（möglichst unverbildet, vorurteilslos und unvorbereitet），自らにとって新しく立ち現われてくる事実を解き明かす心構えをしたのでした。

一人の哲学者のことを理解しようと努力しつつ，人は，必然的にその哲学者の思想を吸収し（思想が浸透してきて），自らの作品において，その支配を被ることになる（deren Lenkung bei seiner Arbeit erleide）のだと私は思います（自らの作品において，このように導かれることで苦しむのだと私は思います）。このようにして私もまたニーチェの研究を差し控えたのです。それは，より正確には私の眼には，彼の視点が私のそれと非常に近くにあるように

6）我が国ではまだ断片的にしか知られていない，フロイトのスピノザ書簡を三通とも完全なかたちで以下に翻訳し掲載する。これらの書簡は，何百通ものフロイトの書簡を編集し掲載したフロイトの書簡集（Freud : 1960）からも漏れたものである。このスピノザ書簡が三通とも出揃い，ヘッシングにより3通まとめて公表されたのはフロイトの死後38年たった1977年のことである（Hessing : 1977a, 1977b）。書簡の原文は全てドイツ語だが，1977a には独仏対訳，1977b には独英対訳で掲載された。

人々の目には映るということが明確であったからではなかったのではありますが。

私は，決して〔思想上の発見の〕優先権（Priorität）を要求したのではありません。私は無教養なので，C・ブルンナーについては無知でありましたし，快の本質についての唯一の有益なものを，私はフェフィナーにおいて見出したのです。

敬具

フロイト

■フロイトのスピノザ書簡②（フロイトからヘッシングへの第一の手紙，1932年7月9日付）（第二スピノザ書簡）

拝啓

私の長い人生の間ずっと，私はこの偉大なる哲学者の思想と同様に人格にも，格別の敬意（eine ausserordentliche Hochachtung）を払ってまいりました。

しかし私は，このような態度をもっていても，スピノザについて，全世界の前で何かを発言する権利が私に与えられるとは思っておりません。それは，他の人によってまだ言われていないことについては，私は何も言うことなどできはしまいという十分な理由からなのです。

ご計画されておられる〔スピノザ生誕300年〕記念論文集に私が参加できないことを以上の言い訳を以ってお許しいただければ幸いです。そして私の共感と敬意（meiner Sympathie und Hochachtung）を間違いないものだと思ってくだされば幸いです。

敬具

フロイト

■フロイトのスピノザ書簡③（フロイトからヘッシングへの第二の手紙，1933年3月19日付）（第三スピノザ書簡）

拝啓

貴方の『スピノザ記念論文集』をご恵送下さり感謝いたします。内容の豊かさと視点の多様性が際立った御本でした。御高著の中で私の名前が言及されているのを見た時に感じた心苦しさは，そこにおいて私と同様に他の二人のお名前も言及されているという事実によって鎮められました。

アインシュタインは適切な言葉でうまく表現しています。つまり，「スピノザへの愛だけでは，貢献を正当化するのに十分とは言えません」[7] と。

御高著を我々の機関紙「イマーゴ」にお送りさせて頂きました。

敬具

フロイト

第二節　フロイトのスピノザ書簡の公表までの経緯と分析

前節に翻訳し掲載したように，フロイトがスピノザに言及した書簡は，現在，三通のみがその存在を確かめられている。書かれた時期は1931年から1933年までで[8]，宛先はビッケルに一通とヘッシングに二通である。これらの書簡はいずれも受け取られてから公表までの時間が相当にかかってしまっている[9]。その経緯について以下で詳しく見る。

例えば，フロイトとスピノザの理論的関係という主題でかなり早い時期に論

7）ヘッシングが編集したこの『スピノザ記念論文集』（Hessing : 1933, 1962）には，巻末に三人の学者からの賛辞が掲載されている。その一人は他ならぬフロイトで（フロイトからヘッシングへの第二の手紙がこれに相当），他の二人はアインシュタインとヴァッサーである。ここにフロイトが引用しているアインシュタインの言葉はこの賛辞の文章からの引用である。

8）実はこの時期までに（つまりフロイトの生前に），既にフロイトとスピノザの関係性を指摘する論文は発表されている（Alexander : 1927, Bickel : 1931）。そして，フロイト自身は少なくとも Bickel : 1931 を読んでいたはずである（注13参照）。

9）公表までの時間がかかりすぎたこと，それとも関係してドイツ語版全集や書簡集にも掲載されていないことが，フロイトとスピノザの関係に対する多くの研究者たちの「異様な沈黙」の一因になったことは間違いない。

文を発表し（Bickel：1931），フロイトによる最初のスピノザ書簡の受取人ともなったビッケルは，フロイトからヘッシングに宛てられた二通のスピノザ書簡の存在を知ることはなったし[10]，戦後間もなく「フロイトとスピノザ」（1946年）という有名な論文を書いたバーナードも，当時はヘッシング宛の一通目のスピノザ書簡しか知らなかった[11]。更には，ヘッシングでさえ当初はビッケル宛ての「第１スピノザ書簡」の存在を知らなかった[12]という。フロイトの３通のスピノザ書簡の全貌が世間に明らかになったのは，これらの書簡が書かれて40年以上が経った，1977年のことであった（注６も参照）。

第二節ａ　フロイトからビッケルへのスピノザ書簡（「第一スピノザ書簡」）

まず，1931年６月28日の日付を持つフロイトによる最初のスピノザ書簡（以下，「第一スピノザ書簡」と呼ぶ）は，三通の中で最も長く，その内容も，フ

10）ヘッシングはフロイトから彼に宛てられた２番目のスピノザ書簡（第３スピノザ書簡）を自ら公表した1977年の論文（ビッケルが亡くなったのは1951年）の中でこう述べている。「もしフロイトからビッケルに宛てられた手紙〔1931年６月28日付の第１スピノザ書簡〕が，受け取られた後すぐにビッケルによって公表されていたならば，彼はそのわずか一年後に私（ヘッシング）が〔フロイトから〕受け取った手紙〔1932年７月９日付の第２スピノザ書簡〕の存在を知る機会をたぶん持ったであろう。特に，ここに初めて公開するもう一つ別の手紙〔1933年３月19日付の第３スピノザ書簡〕についても，ビッケルが同様に知ったならば，彼はおそらく何らかの満足を得たであろう」（Hessing：1977a, 166）。

11）「フロイトがスピノザを知っていて，研究していたということは疑いえない。スピノザがどの程度フロイトの心理学研究に影響を与えたかを述べるのは難しい。おそらくフロイトは，スピノザを哲学者として，また形而上学者としてのみ知っていた。我々が見出すことのできるスピノザへの唯一の言及は，ジークフリート・ヘッシングに宛てられた一通の手紙であり，その日付は1932年７月９日である」（Bernard：1946, 99）。

12）ヘッシングの告白によると，彼がフロイトから最初のスピノサ書簡（第２スピノザ書簡）を受け取った時点（1932年）では，ビッケル宛ての第１スピノザ書簡の存在を全く知らなかった（Hessing：1977a, 169）。しかし，「最近（1974年）発見された，フロイトからビッケルに宛てられた書簡の存在については――断片的なかたちではあるが――バーナードから教えられてまさに初めて知った」（Hessing：1977b, 224）と述べていることから，ヘッシングは第１スピノザ書簡の存在をそれが1975年に公表される前から知っていたようではある。

ロイトが彼のスピノザへの依存と哲学そのものへの自らの態度を本音で語っており，フロイトとスピノザの思想的関係を研究する上では最も貴重な書簡と言える。

この書簡は1975年になって初めてウィニックにより公表された。掲載されたのはイスラエルの精神医学年報で，そこにはこの書簡のオリジナルのフロイト自筆稿の写真も同時に掲載された（Winnik : 1975）。ウィニックによると，ロタール・ビッケル（Lothar Bickel, 1902-1951）が，フロイトからこの書簡を受け取った経緯はこうである。まず，ビッケルは，ドイツのユダヤ人哲学者コンスタンティン・ブルンナー（Constantin Brunner, 1862-1937）と密接に関係し，ブルンナーの学説についての論文も書いたが，このブルンナーの学説とは，本質的にはスピノザ哲学を精密にして新たに定式化したものであった（Winnik : 1975, 1）。ビッケルはフロイトの作品のいくつかを知るに至り，精神分析の理論の多くの概念が，スピノザ哲学のそれとの多くの一致を含むと感じ（心理的決定論や快感／不快原則），また『エチカ』の「欲望 cupido=cupiditas」をフロイトの "libido" の前身と考えた。そしてビッケルはフロイトに「どのくらまで，スピノザの考え方が精神分析理論に影響を与えたと考えるか。またブルンナーの著作を知っているかどうか」を手紙で尋ねることになる[13]（Winnik : 1975, 1）。第一スピノザ書簡は，この手紙に対するフロイトからの返信である。

ウィニックはこの第一スピノザ書簡をベルリンで見てはいたが（ビッケルは1926年から1933年までベルリンの病院に勤めていた），その後のナチ体制や第

13）このあたりの事情をヘッシングはより詳しく教えてくれる。彼によると，ビッケルは自らの論文（Bickel : 1931）を公表した後でフロイトの反応を見たくなり，フロイトにその論文を送った。その際に，「スピノザについてのフロイトの沈黙，スピノザがフロイト自身と彼の作品に否定できない影響を与えているだけにいっそう異様な沈黙（silence insolite）のベールが剥がされるのを見たいという十分に正当な希望を抱いて手紙を添えた」（Hessing : 1977a, 168）。そしてヘッシングによると，ビッケルは，フロイトからの手紙を「憤慨なしに」受け取ることができなかった（Hessing 1977a, 168, Hessing : 1977b, 227）。実際に，フロイトの答えは，「私は無教養なので，C・ブルンナーについては無知でありましたし，快の本質についての唯一の有益なものを，私はフェフィナーにおいて見出したのです」という，ビッケルにとっては期待外れの素気ないものだった。

二次世界大戦の間のビッケルの放浪，そしてビッケル自身の死によって，この手紙は失われてしまったと思い込んでいた。しかし，それは1974年になってトロントでビッケルの遺産から発見された。ウィニックは，彼とビッケルの共通の友人を介してこの手紙のコピーを入手して，1975に公表する運びとなったのである（Winnik : 1975, 1, Hessing 1977a, 165）。つまり，第一スピノザ書簡は，戦前からウィニックを初めとした何人かにその存在は知られていたが，1974年になってやっと再発見され，1975年に公開されたということである。

次にこの第一スピノザ書簡についての若干の分析を行う（本章第三節で詳しく分析する）。第一スピノザ書簡においてフロイトは，「スピノザへの依拠」を告白しつつ，それでもスピノザを直接に引用しなかったのは，「私の〔学問的〕諸前提を彼自身の研究からではなく彼によって醸し出される雰囲気（Atmosphäre）から引き出したから」であると述べていた。ここではこの「雰囲気 Atmosphäre」という言葉にこだわって諸家の分析を紹介する。

マックは，『スピノザと近代の亡霊』（Mack : 2010）という著作の中で，第1スピノザ書簡における，この「雰囲気 Atmosphäre」という言葉の意味について考察している。彼によると，この「雰囲気」というかなり漠然とした言葉を書いた時に，フロイトが心の中で思っていたことは，スピノザと自分の共通性であった。それはつまり「〔自らと〕同時代のユダヤ人のコミュニティーやユダヤ人の歴史に，一方では親和的であると同時に，非親和的でもあること」（Mack : 2010, 198）である[14)]。

マックによると，フロイトとスピノザは「二重の意味でのアウトサイダー」であった。つまり，両者は，「彼らが生きる各々の社会の非ユダヤ的なマジョリティからはユダヤ人として認識されるが，宗教的親和性の観点からは自身のコミュニティーの部分ではないのだ」（Mack : 2010, 198-199）。そして，フロイトとスピノザは，「典型的なユダヤ人と見なされながらも，脅威をもたらすもの，野蛮なもの――あるいはスピノザの場合は，悪魔的なもの――と自動的に関連付けられた」（Mack : 2010, 199）のである。マックは，「フロイトとスピノ

14） 本稿第二節 b でのヨーヴェルの第二スピノザ書簡解釈も参照。

ザの民族性（エスニシティ）についての〔社会の側からの〕このような認識は，別々ではあるが関連した仕方で，擬人観的神概念（the anthropomorphic conception of God）——あるいはフロイトの言葉では，人間性の誇大妄想——を傷つけた，彼らの著作と思想内容の問題によっても補強される」（Mack：2010, 199）と考えている。

ヨーヴェルは，この「雰囲気」という言葉を，スピノザの「思想が創出した知的風土」の意味に取っている（Yovel：1989 vol. 2, 139〔邦訳470〕）。一方，ウィニックはヨーヴェルと同様の解釈をとりつつ，それを具体的に述べている。つまり，「19世紀及び20世紀初頭のヨーロッパの精神的雰囲気（spiritual atmosphere）には，スピノザの思考が広く浸透していた。スピノザからの間接的な影響は，おそらく，フロイトの思想にも及んだであろう」[15]（Winnik：1975, 1）。

ウィニックは，当時のこの「ヨーロッパの精神的雰囲気」に関連して以下の事実に注意を促している。それは「フロイトの先生であるブリュッケ（E. von Bruecke）の師であった生理学者ミューラー（J. Müller）は，スピノザの教えから明白な影響を受けた[16]。フロイトのこの手紙〔第1スピノザ書簡〕で言及されているフェヒナー（G. Th. Fechner）[17]は，スピノザ主義者のシェリング

15）本稿は第三節でこのような素朴で素直な解釈を批判することになる。つまり，フロイトの「雰囲気」という言葉を字義通りに捉えてはいけないと考える。本文で次に紹介する第一スピノザ書簡についてのゴロンブの解釈も参照（Golomb：1978, 286-287）。

16）Bernard：1972, 210, 213.

17）注1でも述べたようにフェヒナーは，フロイトの精神分析学の形成にとって理論的に欠かせない人物である。特にフロイトが彼の「快感原則」をフェヒナーの「安定傾向原則」（恒常性原則）から導き出していることが重要である（Freud：1920：5〔邦訳117〕）。フェヒナーから影響を受けたフロイトの「快感原則」とスピノザ哲学の関連性については河村：2013, 281を参照。またフロイトは，「快感原則」のみならず，その「無意識」の発見や「死の欲動」（タナトス）や「心的エネルギー」概念もフェヒナーに負うているという解釈もある（Ellenberger：1956〔邦訳90-101〕，：1970, 218, 312-313, 479, 511, 514, 542, 548〔邦訳：上巻257, 361：下巻72, 108, 110-111, 142, 149〕）。この問題については第4章でより詳しく論じることにする。

(F. v. Schelling) の弟子であった。シェリングは，彼の哲学的著作において一種の二元論的汎神論に固執した。ドイツと中央ヨーロッパにおけるユダヤ人の知識階級は，スピノザの哲学に近かったし，それをよく知っていた」のである (Winnik : 1975, 2)。ウィニックの哲学的知識がどれほど厳密かは問わないとしても，このように当時のヨーロッパの，しかもユダヤ人の知識人であれば，スピノザの影響が強かった精神的，知的「雰囲気」の中で，意図せずにも（自動的に），スピノザの影響を「間接的に」受けてしまっているのはよくあることで，フロイトもその例外ではないということである。

ゴロンブも，ウィニックのこの解釈を受け継ぎ，（スピノザ的な）「雰囲気」という言葉でフロイトが言おうとしたのは，「19世紀のドイツの心理学と生理学には，スピノザの思考が深く浸透していたという事実」である[18] と主張する (Golomb : 1978, 286)。ただしゴロンブは，スピノザからフロイトへの影響は「間接的」なものではなく，「直接的」なものであると主張する[19]。スピノザからの影響は「間接的な」もの（作品を直接に研究することからでなく，スピノザが醸し出す「雰囲気」から間接的に自らの〔学問的〕諸前提を引き出したに過ぎない）であると，フロイトは告白していた。ゴロンブによると，それにもかかわらず，この第一スピノザ書簡には，このような「雰囲気的な」影響よりずっと大きなものが在ると結論させる（本稿が第二章で考察する，ダ・ヴィンチとスピノザの間にフロイトが設けたもう一つのアナロジーも同じく我々にそう結論させるのだが）ような興味深いアナロジーが存在する (Golomb : 1978, 286)。それはニーチェとスピノザの間のアナロジーである。この書簡の後半部分をゴロンブは引き合いに出す。つまり，「一人の哲学者のことを理解しよう

18) これに続けてゴロンブは述べている。「このようにして，例えば，フロイトが最も深く尊敬した教師であるブリュッケはミューラーの弟子であったが，このミューラーはスピノザの感情理論と一元論的並行論を，自身の貢献の出発点としたという事実を認めていたのである。フェヒナー，ヘルムホルツ，ゲーテといった，フロイトの他の『偶像（アイドル）』もまた熱心なスピノザ主義者であった」(Golomb : 1978, 286)。

19) ゴロンブは，三つの資料（本章注4の②，③，④）からフロイトのスピノザ像を「再構築」して，「フロイトは実際，スピノザの生涯と哲学に完全に精通していた」(Golomb : 1978, 275) と結論付けている。本章注27) も参照。

と努力しつつ，人は必然的にその哲学者の思想に浸透され，自らの作品において，その支配を被ることになる」。であるからこそ，自らの〔理論の〕独立性と客観性を守るのに非常に熱心であったフロイトは，「ニーチェの研究を差し控えた」のである。ゴロンブによると，この自制は，自らの精神分析と非常に似た洞察がニーチェにはあるだろうということが，フロイトにとって明白になったからこそ行われたのである。スピノザとの関係を語っている文脈の中でのニーチェに対するフロイトのこのような態度は，スピノザに対する彼の態度がニーチェへのそれと類似的（analogous）であることを強烈に示唆している（Golomb：1978, 286）。であるならニーチェについてのフロイトの言明に当てはまるのと同じ議論がスピノザについての彼の言明にも当てはまることになるとゴロンブは考える。この議論は，「ニーチェあるいはスピノザの作品を読むことなしに，彼らの洞察が精神分析のそれに非常に似ているということを，フロイトは，いかにしてアプリオリに知りうるだろうか」という簡単な問題から始まる。これに対してゴロンブは，「この哲学者たちの学説についての何らかの予備指知識なしには，フロイトは，自らの知的自律とオリジナリティを失うという『危険』をその程度まで感じることはできなかったであろう」と答えるが，ここから明白な結論が出されることになる。つまり，「スピノザに対するフロイトの関係は（ニーチェへの関係と同様に），フロイト自身の説明とは幾分異なって」おり，スピノザの場合には，フロイト自身が言う「雰囲気」からの「間接的影響」以上のものが存在したと考えられるのである（Golomb：1978, 287）。

第二節b　フロイトからヘッシングへの二つのスピノザ書簡
（「第二・第三スピノザ書簡」）

フロイトからヘッシングに宛てられた二つのスピノザ書簡は，いずれもヘッシングが企画，編集したスピノザ生誕300年の記念論文集（Hessing：1933年）に関連したものである。つまり，まずヘッシングが，フロイトに対してこの記念論文集への寄稿を依頼した。それに対する丁寧な断りの返事が前節に掲げた第二スピノザ書簡なのである（Yovel：1989 vol. 2, 139〔邦訳470〕，Golomb：1978,

275)。この手紙の日付は1932年7月9日で，フロイトがビッケルに送った第一スピノザ書簡の約一年後である。受け取り人であるヘッシングによると，この第二スピノザ書簡の「完全なテクストは，はるかに後で，バーナードによって，第二次世界大戦の終結の後つまり1946年になって初めて公表された」(Hessing: 1977a, 166, cf. Hessing: 1977b, 224, 238 note 3)。

ヘッシングはこの第二スピノザ書簡を受け取った時，その中に「特別の敬意 eine ausserordentliche Hochachtung」とかスピノザへの「共感」というフロイト自身の言葉を見つけてよほど嬉しかったのであろう。そのうえに，ヘッシングはその時，「フロイトからビッケルに宛てられた書簡〔第一スピノザ書簡〕の存在を知らなかったから」[20]，余計に，第二スピノザ書簡での「スピノザに関する自らの依拠についてのフロイトの明白な告白によって，私〔ヘッシング自身〕の最初の『スピノザ祝賀記念論文集1632-1932』(1933年）において，フロイトをスピノザ崇拝者のうちの一人として挙げるように元気付けられた気がした」(Hessing: 1977a, 169,: 1977b, 228）と当時の心情を吐露している。

ヘッシングが，自ら編集して出版されたばかりの『スピノザ祝賀記念論文集1932-1932』(1933年）をフロイトに送った後，彼からヘッシングに1933年3月19日付で御礼の手紙が送られてきた。その手紙の中で，フロイトは，スピノザについて再び触れている。この極めて短く簡潔な第三スピノザ書簡は，どう見ても単なる献本への御礼にしか思えないのだが，ヘッシングはよほど嬉しかったのであろう。その中に「スピノザに対するフロイトの増々明瞭な賛同＝傾倒(adhésion)」を見てとって感動したようである[21]。そしてフロイトからのこの

20) ヘッシングは，ビッケルへのスピノザ第一書簡の存在を知った後で，自らに宛てられたスピノザ第二書簡とそれを比較して「〔スピノザ第二書簡において〕フロイトは，スピノザについてのより積極的な態度を表明していた。その手紙の中でフロイトは，それ以前よりもより親密なスピノザと彼の繋がりを伝えていたのである」と述べている（Hessing: 1977a, 169,: 1977b, 228)。

21) ヘッシングはこうも言っている。「実際に，そこ〔第3スピノザ書簡〕でフロイトは自らの〔スピノザに対する〕態度を，アインシュタインやヴァッサーマンが表明した態度と同一視しながら，スピノザと自分との同盟（alliance avec Spinoza）を確認したのである」(Hessing: 1977a, 167)。

手紙を長い間，大切に秘密裏に縞っていたのである。ヘッシングはこの第三スピノザ書簡をそれまで「まだ決して引き合いに出したことはなかったのだが，フロイトとスピノザの関係に関する〔論争の〕ファイルにこの〔第三の〕手紙を加えるのには，今〔1977年〕がうってつけの好機[22]だと考え」，フロイトからそれを受け取ってから実に44年後の1977年に公表するに至ったのである(Hessing : 1977a, 169,: 1977b, 229)。以上が第二・第三スピノザ書簡が書かれ，後に公表されるにいたった経緯である。

次に，この第二スピノザ書簡についての若干の分析を行う（前述のごとく，第三スピノザ書簡に御礼のリップサービス以上のものを深読みするのは本稿では避けるため第三スピノザ書簡は排除する)。

第二スピノザ書簡の最も重要な冒頭箇所でフロイトは，「私の長い人生の間ずっと，私はこの偉大なる哲学者の思想と同様に人格にも，格別の敬意（eine ausserordentliche Hochachtung）を払ってまいりました」と述べていた。この箇所についての諸家の分析を紹介する。

まず，ヨーヴェルはこの箇所で「フロイトは単なる礼儀が必要とするよりも遥かに強い言葉を用いている」としたうえで，スピノザの人格に対して向けられる「格別の敬意」の意味を考えている。彼によれば，フロイトは「スピノザの人物像のうちに自らの反映」を見ることができたかもしれない。それは，「支配的な文化の表層下から発掘した真理に忠義を尽くし，その結果，敬意と嘲笑を浴びせられた，孤独な革命家の姿」である。フロイトにとってスピノザは「自らの思想とその道の困難さを誠実に生き，自分に課せられた孤独と天分を歩んでいく上での兄弟」であったのである。ヨーヴェルはそこに信仰を失いながらもユダヤ人としての特徴を担い続けている「不信仰の同志」[23]を見てい

22)　状況を総合的に考慮すると，ヘッシングは自らがフロイトから受け取った第3スピノザ書簡をこの「好機」が訪れるまで，長らく「隠していた」と言えそうである。特に自らがこの問題に関して影響を受け，ビッケル宛ての第一スピノザ書簡の存在を教えてもらったバーナードにすらそれを「隠していた」という事実は興味深い。本章注11と12も参照。

23)　本章序でも指摘したように，フロイトは『機知』において，ハイネの言葉とし↗

た（Yovel: 1989 vol. 2, 139〔邦訳470〕）。

マックの考えでは，ビッケルへの手紙の中で，フロイトは，「スピノザの作品の事実上の研究者としての自身のあり方を控えめに申告」している。しかし，その後のヘッシングへの書簡から明らかなように，「体系的研究のこのような欠如〔スピノザの醸し出す雰囲気から学的前提を引き出すこと〕は，フロイトがスピノザの思想によって自らの思想を形成することはなかったと，いうことを意味しない」。ヘッシングへの第二スピノザ書簡で，スピノザの生誕三百周年に捧げられた論文集に貢献することを辞退しつつも，フロイトは「スピノザへの知的な借り」を強調した。つまり，「私の長い人生の間ずっと，私はこの偉大なる哲学者の思想と同様に人格にも，（秘かに）〔マックによる挿入〕格別の敬意を払ってまいりました」と（Mack: 2010, 199）。

マックによると，この箇所で暗にフロイトは，スピノザを「単一で孤立した人物」として考えるのではなく，むしろ「スピノザの名において，レッシング，ヘルダー，ゲーテからダーウィンに至る思想家や著作家たちから成る一つの知的な集団配置（an intellectual constellation of thinkers and writers」を見ている。それらの人々は，我々が人間性を地上におけるあたかも神的な代表者（a quasi-divine representive on earth）として見るのではなく，自然のマテリアルな領域の内に深く包まれたものとして見る，その方法に様々なシフトを導入した人たちであった。第一スピノザ書簡で自ら告白しているように，フロイトが自らの様々な精神分析的研究の中でスピノザの名に言及するのを避けたのは，このような「スピノザの作品からの，定義できない，超個人的な影響 non definable and superindividual influence of Spinoza's work」によるものかもしれない[24]，とマックは主張する（Mack: 2010, 199）。しかしマックのこのような解釈は，結局（本稿が第二節bで考察した），第一スピノザ書簡における「雰囲

↘て，「我が不信仰の同志スピノザ Mein Unglaubensgennose Spinoza」を挙げている（Freud: GW/VI/83〔邦訳91〕）。

24）本稿第三節で考察する，スピノザに対するフロイトの「異様な沈黙」の一つの理由。

気」の解釈につながっている。フロイトがスピノザが醸し出す「雰囲気」から自らの学的諸前提を導き出したと告白した時，マックにとって，それは，「スピノザ」という名前に含まれているレッシング，ヘルダー，ゲーテからダーウィンあるいはハイネに至る，「擬人観的神概念」を破壊する知的伝統の総体からの影響を意味しているのである。

バーナードによると，この第二スピノザ書簡の冒頭箇所でフロイトは，スピノザについての知識を有していることを率直に認めてはいるものの，「いかなる直接的影響の証拠も〔フロイトには〕存在しない」[25]。フロイトは，「彼の基本的な心理学的見解に主に実験的な道を通って，医学や精神病理学の研究によって到達した。そして彼は，このような見解を彼自身の精神の明敏さと天賦の才によって発展させたのである」(Bernard : 1946, 99-100，傍点による強調はバーナード自身による)。つまり，このような，思弁的でなく実験的な方法によって形成され発展しているフロイトの精神分析学には，スピノザどころか哲学も必要ではなかったと，バーナードは言いたいのである。しかし，自らの心理学的発見を体系化し，全包括的理論原理を見い出そうとする努力が，フロイトの人生と作品を特徴づけている以上，フロイトがスピノザの『エチカ』の心理学の体系を吟味し批判的に評価する機会を持たなかったのは誠に遺憾であると，バーナードは述べている。彼によると，実は，両思想家の最も普遍的で，最も強烈な一致点は「徹底した心理的決定論（*phychic determinism*）」にあるのだ[26] (Bernard : 1946, 100，傍点による強調はバーナード自身による)。

ゴロンブは，この第二スピノザ書簡の内容は，「額面通りに」受け取るべきだと言う。つまり，上述のスピノザ論文集（Hessing : 1933年）への寄稿依頼に対する丁寧な辞退のみを意図していたのなら，フロイトは，もっとシンプルな

25)　しかし既に本稿が注11でも示したように，バーナードが知りえた，フロイトによるスピノザ言及は，現在知られている五箇所のうちたった一つであった（第二スピノザ書簡）。バーナードが他の四箇所（特にダ・ヴィンチ論や『機知』でのスピノザ言及）を知っていたなら，また違った主張をしたであろう。

26)　スピノザとフロイトの心理学説そのものの比較検討（例えばスピノザの「感情の模倣」とフロイトの「同一化」）については本稿の第四章以降で詳細になされる。

言い訳の手紙を書くこともできたろうし，「この哲学者〔スピノザ〕についての学問に貢献するためのオリジナルなものは何一つ持っていません」という，この書簡の第二の部分（第二節）の内容のみを返信しさえすれば，編者（Hessing）を満足させることもできたろう。更に，スピノザ哲学に対する無知を公に認めることが辛ければ，この手紙の公表（本稿注7参照）を単に拒絶できたであろう。しかし実際は，フロイトはそうしなかった。その理由は，スピノザとその哲学へのフロイトの「並々ならぬ敬意（オマージュ）」であり，それが「純粋な態度」となって現れたのが第二スピノザ書簡の内容なのである（Golomb: 1978, 276）。

こうして第二スピノザ書簡を「額面通りに」解釈すると，以下の三つが結論されるとゴロンブは言う。第一に，「フロイトはスピノザの伝記と学説について長年に渡り身に付けた深い知識を持っていた」こと。第二に，第一の結論は，この書簡の第二の部分（第二節）の「私は，スピノザについて，スピノザ解釈者たちがまだ言っていないような新しいことを何一つ言えません」というフロイトの主張によって更に確証できる。つまり，この主張には「フロイトは，スピノザに関する当時の〔解釈者たちの〕文献に精通していた」ということ[27]が前提されているのである。そして第三に，「スピノザに対するフロイトの『内気（シャイ）な』関心は，哲学一般に対する，そして特に彼以前の哲学者たちに対する強く両義的（アンビヴァレント）な態度をもう一度例証している」のである（Golomb: 1978, 276）。

第三節　フロイトと哲学
――スピノザについてのフロイトの異様な沈黙と拒絶について――

本稿はこれまでに，フロイトが書いた三つのスピノザ書簡を分析することに

27）ゴロンブによると，フロイトの書斎には，哲学史家クーノ・フィッシャーによるスピノザの生涯と思想についての包括的な大部の解説書（Fischer: 1898）があった。フロイトはナチスに迫害されてイギリスに逃れた時（1938年）に，他のあまり重要でない本は置き去りにして行ったのに，このスピノザ解説書は携えて行っていることからも，この本は「フロイトにとって特別に大切な本であった」と考えられる（Golomb: 1978, 276）。

よって，フロイトがスピノザから影響――その具体的内容を現段階ではまだ明確化していないにせよ――を受けていることが確認された。第一スピノザ書簡でのフロイト自身の弁明によれば，スピノザからの影響を彼が自らの精神分析研究の中で直接に記さなかったのは，彼のスピノザ研究が本格的な専門家のそれではなく，「雰囲気」から学ぶといったものであったからだった。しかし，フロイトのそのような弁明を鵜呑みにしてよいのだろうか。我々は，自らにとって大事なものをこそ隠したがり（抑圧），攻撃する傾向がある（反動形成）のを教えてくれたのは他ならぬフロイトの精神分析学であった。フロイトは，本心では，スピノザを，哲学をどう思っていたのか。この重要な問いに本稿全体を書き終わった時に答えることが，本稿の目標の一つなのだが，本節では，スピノザについてのフロイトの「異様な沈黙と拒絶」について調べたうえで，この問いに対する現段階での暫定的な答えを用意したい。

フロイトの「第三スピノザ書簡」の受け取り人であるヘッシングは，「フロイトとスピノザ」(1977年）という論文の中で，スピノザについてのフロイトの異様な沈黙と拒絶について考察している。ヘッシングは，「フロイトが自らの作品の中で守ったスピノザについてのどう見ても意図的な沈黙を，もっと明るみに出す」という試みは興味深いし価値あることである，と述べている(Hessing : 1977a, 165,: 1977b, 224)。しかし，スピノザについて沈黙してきたのはフロイト自身だけではなかったのではないか。「フロイトに関するますます豊富になった文献により，多くの非常に多様な事柄が明るみになったが，あいにく，スピノザについて語られたことは，依然として（まだ）ほとんど何もない」(Hessing : 1977a, 165）のである。つまり問題となっている「沈黙」は，「フロイト自身とフロイトについて書いてきた人々の不思議な沈黙（silence étonnant)」，「異様な沈黙 silence insolite」なのである（Hessing : 1977a, 165, 168, 1977b, 224, 227)。

もちろんそれには例外もあり，アレクサンダーに始まり（Alexander : 1927)，本稿がこれまでに参照してきたビッケル（Bickel : 1931）やバーナード（Bernard : 1946,: 1972）といった研究者たちの「フロイトとスピノザ」についての古典的

な比較研究の歴史はあった。これらの先行研究は，スピノザとフロイトの精神分析学に緊密な繋がりがあり，思想の方向性が同じであるのに，フロイト自身も他の研究者もスピノザの名前を決して挙げないことに，「驚きの合唱」を歌ってきた（Hessing : 1977a, 166 : 1977b, 225）。

このような「沈黙」と「驚き」を歎いたヘッシングは，状況を打開し，フロイトによるスピノザの「異様な拒絶 refus insolte」という「虚偽の観念」を破壊するために，問題の現場にフロイト自身の声を届けようとする（Hessing : 1977a, 167 : 1977b, 226）。つまり，四十年以上も大切に隠し持っていた，フロイトからもらったスピノザ書簡（第三スピノザ書簡）を，フロイトとスピノザの関係の研究のファイルにつけ加えるという歴史的な使命を遂行しようとしたのである[28]（Hessing : 1977a, 165）。ヘッシングは，「スピノザ主義の伝統の精神に従って」，フロイト―スピノザ問題（の「驚きの合唱」）に，今，この論文によって「自分に固有の反響（エコー）」を響かせたい，と宣言している（Hessing : 1977a, 167 : 1977b, 226）。ヘッシングのこの努力は無駄であった，と私は思う。彼が長年隠し持っていた第三スピノザ書簡の（既に本稿第二節 b でも言ったように，短すぎて献本の御礼以上の意味もない）性質上，ヘッシングのエコーは響かなかったのである。当該問題の研究の進展にとっては，書簡としては第二スピノザ書簡までで十分であった。あとは，フロイトがスピノザについて言及した二つのテクスト（本章注 4 の①と②）を分析することの方がよほど有益なのである。そして本稿はまさにそれを試みようとしているのだ。

ヘッシングが，フロイト―スピノザ問題の解釈史に，三番目の書簡を提出したところで，フロイト自身のスピノザに対する「異様な沈黙」，「異様な拒絶」の事実はなくならない。では，そのような沈黙と拒絶の理由について，フロイト自身の真意に迫って考えたい。

28） 本稿注22でも指摘したが，ヘッシングは，フロイトからもらった二通目のスピノザ書簡（第三スピノザ書簡）の内容を過大評価し，こっそりと隠していた。四十年以上経ってやっと，歴史的意義のある（と自ら思いこんだ）書簡を公表する決心をしたこの論文（Hessing : 1977a,: 1977b）においても，独自のレトリックで勿体をつけて時間（文字数）を稼ぎ，潔くすんなりとは公表しなかった。

ここではビッケルに宛てられた「第一スピノザ書簡」を中心的題材とする（本稿第一章第一節に掲載）。第一スピノザ書簡の前半部でフロイトはこう述べていた。

> 「彼（スピノザ）の名前をわざわざ直接に引用しなかったのは，私の諸前提を彼自身の研究からではなく彼によって醸し出される雰囲気（Atmosphäre）から引き出したからなのです。そしてまた，哲学的な正当化一般を行うことは私にとっては重要ではなかったからです。生来私は〔哲学の〕才能に恵まれてはいないので（Von Natur aus unbegabt），この災いを転じて福となし，可能な限り加工を施すことなく，先入見を持ち込まず，そして準備なしに（möglichst unverbildet, vorurteilslos und unvorbereitet），自らにとって新しく立ち現われてくる事実を解き明かす心構えをしたのでした」。

つまり，フロイトは自らの精神分析研究において，スピノザに直接に言及することがなかった（「異様な沈黙」）その理由として，① スピノザの「雰囲気」から学んだにすぎず[29]，② 生来，哲学の才能がないので，科学的（実証主義的）態度を心がけ，哲学的正当化を重要としなかったから，という二つを挙げている。最初の理由については第二節ｂで概観したので，ここでは二番目の「沈黙」の理由について考える。

この二番目の「沈黙」の理由を考察するために以下に，第一スピノザ書簡の六年前に，フロイトが書いたテクスト『みずからを語る』（初版1925年）を呼び出したい。このテクストは驚くほど，内容的に第一スピノザ書簡と重複するものである。

> 「これら近年の仕事では私が根気のいる観察（Beobachtung）に背を向け，全くの思弁（Speculation）に耽っていると考えないで頂きたい。むしろ私は，変わることなく精神分析の素材に間近く接しているし，特殊な臨床的ないし技法的なテーマに取り組み続けてきた。観察を離れている時でも，本来の意味での哲学に近づかないように用心している。〔哲学に対する私の〕生得的な才能のなさ（Konstitutionelle Unfähigkeit）が，こうした態度を貫くのをいと

29）　本稿注24参照。

も簡単にした。私はかねてから，G. Th. フェヒナーの見解に親しんでおり，重要な事柄になるとこの思想家に依拠してきた。精神分析とショーペンハウアーの哲学との大幅な一致――彼は感情の優位と性の際立った重要さを説いただけでなく，抑圧の機制すら洞見していた――は，私がその理論を熟知していたがためではない。ショーペンハウアーを読んだのは，ずっと後になってからである。哲学者としてはもう一人ニーチェが，精神分析が苦労の末に辿り着いた結論に驚くほど似た予見や洞察をしばしば語っている。だからこそ，私は彼を久しく避けてきたのだ。私が心がけてきたのは，誰かに先んじること（Priorität）にもまして，とらわれない態度（Unbefangenheit）を持することである」　（Freud：1925, 1928, 1948, GW/XIV/86〔邦訳121-122〕）

一瞥しただけでも，『みずからを語る』のこの箇所には，第一スピノザ書簡と共通する言葉や問題がいくつも見い出される。それは，「フロイトの生来的な哲学の才能の欠如」，「フェヒナーへの依拠」，「ニーチェとの思想的接近ゆえの回避」，「誰かに先んじること＝優先権」（Priorität）の問題」，「先入見を持たない，とらわれない態度の重要性」などである。このような少なからぬ類似点があるにもかかわらずこのテクストは全体として，第一スピノザ書簡よりも，哲学に対するフロイトの警戒心と「距離」を強く示しているように思われる。しかし後で見るように，これは六年の間にフロイトが哲学への態度を少し軟化させたということではない。フロイトの，哲学そのものへの距離は本質的に変わっていないと考えたい。

二番目の「沈黙」の理由を考察するために，もう一つ別のフロイトのテクストを以下に掲げる。これは，上に掲げた『みずからを語る』（初版1925年）の二年後，第一スピノザ書簡の四年前の1927年にフロイトがヴェルナー・アヒェリスに宛てた書簡である（該当箇所のみを引用する）。

■ヴェルナー・アヒェリス宛（1927年1月30日付）書簡

「私の哲学（形而上学）に対する態度はあなたもご承知のように思われるからです。私の素地の他の欠陥であれば，きっと私は悩まされ，謙虚にさせられたことでしょうが，形而上学に関してはそうではありません。私は形而上

学に対する器官（「能力」）を持っていないばかりでなく形而上学に対する何の敬意も持ってはいません（ich habe nicht nur kein Organ (›Vermägen‹) für sie, sondern auch keinen Respekt vor ihr.）。密かに私は――大声で言うわけにはゆかないでしょうが――形而上学というものはいつか「有害なもの a nuisance」，思考の誤用，宗教的世界観の時代の「遺物」と判決を下されるであろうと信じています。こういう考え方がいかに私をドイツ文化圏に縁遠いものとしているかは，よく心得ています。――中略――いずれにしても，哲学の彼岸によりも事実の此岸に道を見出すことのほうがおそらく簡単でありましょう」（Freud : 1960, 389〔邦訳377〕）

ここでもフロイトは，自分が哲学（形而上学）に対する能力を持っていないことを強調している。この書簡は二年前の『みずからを語る』よりも哲学への敵対性をより強めて「攻撃的」な態度になっている。見逃してはいけないのは，哲学に対しては「能力を持っていない」だけでなく何の「敬意 Respekt」も持っていないとフロイトが告白していることである。既に第一節で見たように，フロイトは第二スピノザ書簡（この書簡の五年後）において，哲学者スピノザへの「格別の敬意（eine ausserordentliche Hochachtung）」を表していた。あれは単なるリップサービスだったのであろうか。スピノザも含めた哲学に対するフロイトの本当の気持ちとは一体どういうものなのだろうか。フロイトの三つのスピノザ書簡に，スピノザへの依存と愛と敬意のみを，また学問に対する知的誠実さや謙虚さののみを見出すような解釈は袋小路に陥ってしまう。フロイトが繰り返し言っている「哲学に対する才能のなさ」を額面通りに受け取ることには慎重になるべきではなかろうか。

この難問に関しての諸家の考えを以下にまず検討する。

ウィニックは，第一スピノザ書簡を公表したまさにその論文の中で，第一スピノザ書簡にフロイトの「自信に裏付けされた謙虚さと学問的誠実さ」を見出しながらも，「生来私は〔哲学の〕才能に恵まれてはいない」というフロイトの言葉に対して，それに矛盾するフロイトの別の文章を対置させている（Winnik : 1975, 2）。つまり，「若かったころ私は，哲学的認識に対してよりも強

く憧れをもったものなどなかった」[30]，「哲学――それは私がこの世の中で何をやりたいのか知る前からの，私の最初からの野望でした」[31]。この矛盾に対するウィニックの解決方法はシンプルなものである。彼はこう述べる「フロイトは，世界の現実性を構成しているものを見出そうと，その人生の間中奮闘する中で，自らの哲学への傾向性を抑圧し否定するように努力したのは明らかである」(Winnik : 1975, 2)。つまり，ウィニックの解釈では，フロイトには哲学に対する才能じたいは存在したと考えられる。しかし科学的，実証的な精神分析学の発展のためには，自らに生来備わった哲学的才能をフロイトは抑圧し故意に隠さざるを得ず，それが「生来私は〔哲学の〕才能に恵まれてはいないから」という内容の言葉を繰り返しフロイトが語った理由になっているというものである[32]。

次にローゼンの解釈を見てみよう。ローゼンは多様な資料を駆使しているが，それによるとフロイトは，何度も「哲学を心から嫌っている」という発言をしていたらしい。しかしローゼンも，フロイト自身の告白に反して，彼には「哲学に対する才能」があったと考えている。そしてウィニックが掲げたような若きフロイトの哲学への憧れと野望も確認し，哲学のたまらない魅力について告白したフロイトの文章も発掘している。

哲学に対するフロイトのこの矛盾した態度の背景にローゼンもやはり，科学としての精神分析と哲学の間で引き裂かれるフロイトを見ている。「自らの仕事が，立証不能な想像上の飛躍と混同されるかも知れないという外的な恐れは，

30）ウィニックはこの文章の出典を示していないが，1986年4月2日付のフリース宛書簡の一部と同じ内容である（Freud : 1960, 244)。

31）ウィニックの引用の直前には「私は秘かに，私自身の独創的で客観的な哲学に（医学と）同様の道筋を通って到達したいという希望を暖めています。なぜなら……」というフロイトの文章がある。なおウィニックはこの文章の出典も示していないが，やはりこの二つの文章を引用したローゼンは，1986年にフリースに書かれた二通の書簡が出典としている（Roazen : 1968. 106-107)。

32）ウィニック自身は言っていないが，彼のような解釈を取るならば，上に掲げた『みずからを語る』やアヒェリス宛書簡での哲学に対するフロイトの攻撃は，精神分析でいう「反動形成」の表れと言えよう。

彼の最も強い〔哲学への〕知的衝動についての内的な恐れと支え合っていた」。こうして「フロイトは哲学書をほとんど読まなかったのだが，それはまさしく彼に自然に備わった哲学の才能のせいであった」のだ。ローゼンによると，フロイトは，自らの哲学的欲求を抑圧したことを自ら告白さえしている。フロイトの「自己の思索的傾向への禁欲は，彼の厳しい知的水準を示すものであり，そのような形での自己非難は，外部からやってくると思われる想像上の批判を，いわば先取りすることによって処理するひとつの便法であった」のである(Roazen : 1968, 102-107〔邦訳104-108〕)。

最後に，ヨーヴェルの解釈を見てみよう。ヨーヴェルによると，フロイトの哲学に対する態度は両価的であった。しかし哲学から彼を遠ざけたのは哲学の「思弁的性質」であったのだ。フロイトが，ニーチェに思想的親近感を抱きつつも，ニーチェを読むのをやめたのは「純然たる経験的探求を必要とする事柄において，思弁的な思想家に歪んだ影響を与えられるのを」恐れたからである(第一スピノザ書簡と『みずからを語る』の先の引用を参照)。結局ヨーヴェルも，フロイト自身の哲学の才能を認めている。そしてフロイトとスピノザの「親近性は余りにも顕著だったので，必要と感じたら自分はスピノザから哲学的正当化を得ることができた」とフロイトは思っていたはずだと主張する。しかしニーチェの時と同様にフロイトは「おせっかいな正当化を退け，自分に危険なまでに近しい哲学者から受けることになるであろう思弁的な影響を遠ざけたのである」(Yovel : 1989 vol. 2, 139〔邦訳468-470〕)。

以上のフロイトの三つの書簡の分析から，フロイトがスピノザから影響を受けていたことが判明したが，その具体的内容までは，フロイトは言及していなかった。そこで，次章では，フロイトの「レオナルド・ダ・ヴィンチ論」におけるスピノザへの言及を考察することによって，フロイトがスピノザ哲学のどの部分から影響を受けているかを考察する。

(続く)

〈文　献　表〉

1. フロイトのテクストはフィッシャー版全集（Sigmund Freud, Gesammelte Werke, 18 Bde. und ein Nachtragsband, hg. v. Anna Freud u. a., Frankfurt. a. M. S. Fischer, 1960ff.）を用い，引用に際しての略号は慣例に従った。略例を以下に示す。

   例　(Freud : GW/VI/83)＝フィッシャー版全集の第六巻の83頁

2. 下線（傍線）による強調，〔　〕による挿入は全て，著者河村による。

3. 外国語文献の引用・参照の指示については以下の例に倣う。

例　(Yovel : 1989 vol. 2, 158〔邦訳468〕)＝Yovel, Y., 1989, *Spinoza and Other Heretics* (vol. 2), Princeton University Press, p. 158（『スピノザ異端の系譜』，小岸 昭・E. ヨリッセン・細見和之訳，人文書院，1998年，p. 468）

Alexander, B., 1927, "Spinoza und die Psychoanalyse", Chronicum Spinozanum 5.

Bernard, W., 1946, "Freud and Spinoza", Psychiatry : Journal of the Biology and the Pathology of Interpersonal Relations, Vol. 9 (1946), William ALanson White Psychiatric Foundation.

——— 1972, "Spinoza's influence on the rise of scientific Psychiarty : A neglected chapter in the History of Psychology", Journal of the History of the Behavioral Sciences, Vol. 8 (1972), Clinical Psychology Publishing Company.

Bickel, L., 1931, "Über Beziehungen zwischen der Psychoanalyse und einer dynamischen Psychologie", Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete, Band 4, 1931, Verlag von S. Hirzel in Leipzig.

Ellenberger F., H., 1956, "Fechner and Freud", Bulletin of the Menninger Clinic, 20, no. 4 (July 1956)：「フェヒナーとフロイト」，所収『エランベルジェ著作集1：無意識のパイオニアと患者たち』中井久夫編訳，みすず書房，1980年.

——— 1970, *The Discovery of the Unconscious : The History and Evolution of Dynamic Psychiatry*, Basicbooks：『無意識の発見』（上・下）木村敏・中井久夫監訳，弘文堂，1980年.

Fischer, K., 1898, *Spinozas Leben, Werke, und Lehre*, Carl Winter.

Frank, B., & Nathalie, C., 1993, "Freud et Spinoza : La question de la transformation et le devenir actif du sujet", in : *Spinoza au XXe siècle*, sous la direction de Olivier Bloch, Presses Universitaires de France.

Freud, S., 1905, *Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten*, Gesammelte Werke (Bd. 6), Fischer Taschenbuch Verlag, 1999 :『機知——その無意識との関係』中岡成文・太寿堂 真・多賀健太郎訳，フロイト全集第8巻，岩波書店，2008年.

——— 1910, *Eine Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci.* Gesammelte Werke (Bd. 8), Fischer Taschenbuch Verlag, 1999:『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の想い出』甲田純生・高田珠樹訳，フロイト全集第11巻，岩波書店，2009年.

——— 1920, *Jenseits des Lustprinzips* Gesammelte Werke (Bd.13), Fischer Taschenbuch Verlag, 1999: 中山 元訳「快感原則の彼岸」，所収　竹田青嗣編，『自我論集』，ちくま学芸文庫，1996.

——— 1925, "Selbstdarstellung", Gesammelte Werke (Bd.14), Fischer Taschenbuch Verlag, 1999:「みずからを語る」家高 洋・三谷研爾訳，フロイト全集第18巻，岩波書店，2007年.

——— 1960, 1968, 1980, *Sigmund Freud Briefe 1873-1939* (Ausgewählt und herausgegeben von Ernst und Lucie Freud), S. Fischer Verlag:『書簡集』生松敬三他訳，フロイト著作集第8巻，人文書院，1974年.

——— 1968, *Gesamtregister*, Gesammelte Werke (Bd. 18), Fischer Taschenbuch Verlag, 1999.

Golomb, J., 1978, "Freud's Spinoza: A Reconstruction", The Israel Annals of Psychiatry and Related Disciplines, Vol. 16 (1978), Jerusalem Academic Press.

Hessing, S., 1933, 1962, Herausgegeben, *Spinoza Dreihundred Jahre Ewigkeit Spinoza-Festschrift 1632-1932*, Nijhoff.

——— 1977a, "Freud et Spinoza", Revue Philosophique No 2-Avril-jun, 1977.

——— 1977b, "Freud's Relation with Spinoza", Speculum Spinozanum 1677-1977, ed. by Hessing, S., Routledge & Kegan Paul, 1977.

Kaplan, A., 1977, "Spinoza and Freud", Journal of American Aeademic Psychoanlysis 5 (1977): 299-326.

Mack, M., 2010, *Spinoza and the Specters of Modernity: The Hidden Enlightenment of Diversity from Spinoza to Freud*, Continuum.

Neu, J., 1977, *Emotion, Thought and Therapy*, University of California Press.

Roazen, P., 1968, 1999, *Freud: political and Social Thought*, Tranceaction:『フロイトの社会思想』，馬場謙一・小松 啓訳，誠心書房，1986年.

Winnik, H., Z., 1975, "A Long-Lost and Recently Discovered Letter from Freud", The Israel Annals of Psychiatry and Related Disciplines, Vol. 13 (1975), Jerusalem Academic Press.

Yovel, Y., 1989, *Spinoza and Other Heretics* (vol. 2), Princeton University Press:『スピノザ異端の系譜』，小岸 昭・E. ヨリッセン・細見和之訳，人文書院，1998年.

ヴィゴツキー，2006，神谷栄司他訳，『《最後の手稿》情動の理論——心身をめぐる

デカルト，スピノザとの対話』，三学出版，2006年.
門林岳史，2000，「G. Th. フェヒナーの精神物理学――哲学と心理学の間，精神と物質の間」，『現代思想』28-5，（2000年４月）.
河村　厚，2013，『存在・感情・政治――スピノザへの政治心理学的接近』，関西大学出版部，2013年.
松田克進，1995，「スピノザと精神分析」，『倫理学年報』第44集，日本倫理学会（のちに同著者『近世哲学史素描　デカルトからスピノザへ』，行路社，2011年の第六章に同タイトルで所収）。

「本研究は，平成25年度関西大学国内研究員研究費によって行った。」